

2000/12

Vol. 9

石川県リハビリテーションセンターニュース

寄稿



「リハビリテーション活動に寄せて」

石川県健康福祉部長 濱名久司

リハビリテーション活動に関する業務に従事されている皆様方には、日頃より、県民へのサービスの普及・向上にご尽力いただき、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

さて、「リハビリテーション活動」とは申し上げるまでもなく、様々な疾患や障害のある人々の自立と社会復帰、社会参加等を目指す活動であります。

その分野は理学療法、作業療法、言語療法等の医学的リハビリテーションをはじめ、教育的、職業的、心理学的、社会的リハビリテーション等の分野に大別され、その対象と活動は誠に幅広いものがあります。

また、リハビリテーションの目的は、障害者等個人の日常生活の向上、社会参加の促進を目指すことはもとより、すべての人々が、住宅、交通機関等社会サービスや教育、就労機会の享受など、スポーツやレクリエーションを含めた社会資源・システムの利用を可能にしていくという高い目標やノーマライゼーションの理念を持って拡大、発展してきていると思います。

県内においては、多くの医療、保健、福祉、教育、職業等の関係機関や施設、団体で様々なリハビリテーションと活動が行われているところであり、関係の方々のご苦勞に敬意を表する次第です。

石川県といたしましても、ハード・ソフト両面にわたる多くの施策を実施してまいりました。

平成6年10月に石川県リハビリテーションセンターを設置、以来、リハビリテーションに関する、専門従事者への研修、普及啓発事業を実施し、また、平成8年からはバリアフリー推進工房を設置して福祉用具開発の指導や研究、さらに、平成10年からはバリアフリー体験住宅「ほっとあんしんの家」を設置するなど、多くの県民及び専門家にご活用頂いているところであります。

平成9年3月には、「石川県バリアフリー社会の推進に関する条例」が制定され、住宅や公共施設、街並みなどのバリアフリー化の推進、ユーザーや専門家の意見を反映したより良い福祉用具の開発、保健福祉センター等と連携した「福祉用具・住宅改造相談」等を実施し、県民の皆様方のリハビリテーション支援の一助としているところです。

本年度からは、4月に施行された介護保険制度による「訪問・通所リハビリテーション」、「福祉用具の貸与」、「住宅改修助成」等のサービスが開始されたところであり、対象者の身体的能力や生活目標に合ったよりよい福祉用具が選択・提供されることや、より安全で快適なバリアフリー住宅への改修支援が求められてくると考えられます。

今後、ますます期待されるリハビリテーション活動が、障害のある人が生活する身近な地域においてより充実されるとともに、関係機関等が相互に連携・協力されるよう、皆様方の一層のご尽力をお願い申し上げます。

第27回 国際福祉機器展 H. C. R. 2000 報告

「第27回国際福祉機器展 H. C. R. 2000」は、平成12年9月12日(火)から9月14日(木)の3日間、全国社会福祉協議会、保健福祉広報協会の主催で東京ビッグサイトにおいて開催されました。過去最大規模となる国内520社、海外112社の出展があり、入場者はのべ13万人を超えるものでした。

今回は、平成12年4月からスタートした介護保険制度の影響が大きく現れており、福祉用具等の貸与や購入の種目(車いす、特殊寝台、歩行器、移動用リフト等)に対応した新製品や開発品が数多く出展されていました。一つの製品でより多くの人へ対応ができるような部品選択や調整機能、さらに他の製品と差別化を図るための付加機能がアピールされていました。例えば車いすでは、調整機能が付いたモジュラータイプ車いすや座面と背面が一体となって前後に傾くチルト機能付き車いす等がありました。



モジュラータイプ車いす



チルト機能付き車いす

その他、注目を集めていた開発品としては、二輪で起立して走行したり、階段を昇降できる電動車いす(米国製)がありました。これは、ジャイロセンサーの働きで常に使用者の姿勢を水平に保ち、通常走行、回転型四輪駆動による段差乗り越え、二輪起立走行、階段昇降といった四つの駆動モードで移動することができるものです。現在、米国の方ではFDA (Food and Drug Administration) の認可を得るための安全性テスト、臨床テストが行われているようです。



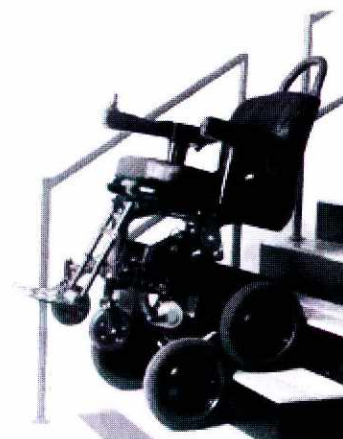
通常走行



回転四輪駆動



二輪起立走行



階段昇降

紹介した製品をはじめ数多くの福祉用具が出展されていましたが、それぞれに特徴(長所/短所)があり、使用者の能力や使用環境に適合したのものを使うことが重要となります。よく考えてから導入を図ることをおすすめします。
(担当:北野)

研修だより

「福祉用具・住宅改修に関する研修」を実施して

「福祉用具・住宅改修に関する研修」は、当センターが従来から開催しているリハビリテーション教育研修事業の一環として実施したものです。4月から介護保険制度が施行されたことで、当センターにも介護支援専門員から福祉用具や住宅改修に関する制度や利用方法についての相談をよく受けるようになったことがこの研修を実施するきっかけになったともいえます。

今回の研修は、介護支援専門員と県保健福祉センターや市町村関係者等を対象とし、福祉用具と住宅改修に関する制度の利用方法等の理解を深めることを目的とするもので、地域の中で住民に対する支援体制が構築されることを期待して実施しました。

表1は、市町村職員等を対象とした「リハビリテーション従事者研修」及び介護支援専門員等を対象とした「福祉用具・住宅改修に関する研修」の研修内容と結果です。リハビリテーション従事者研修では、2回の研修で合計102人が受講しています。福祉用具・住宅改修に関する研修では、県内を4地区に分けて実施し、合計215人が受講しました。参加事業所数で見ますと、246ヶ所の居宅介護支援事業所のうち148ヶ所（約60%）からの参加がありました。

これら二つの研修を通じて検討された事項をまとめてみます。福祉用具については、介護支援専門員の制度利用上の基礎的知識不足や車いすのオーダーメイドの取り扱いなどの問題が明らかにされています。住宅改修については、自立支援型住宅リフォーム推進事業の運用上の混乱や対象障害者の範囲拡大および対象工事の拡大要望などが出されました。これは制度そのものにかかわる問題なので、当面の研修課題としては、①介護支援専門員のフォローアップ研修、②市町村職員のフォローアップ研修と意識改革、③福祉用具・住宅改修に関する支援体制の構築などが今後の課題として残されました。

また、受講者のアンケート結果では、市町村職員に総合相談業務と指導援助の実践力強化を望む声や地域で開催する技術的研修や事例検討を取り入れた研修など、研修の機会拡大を期待する意見が多くありました。一部の地域ではすでに研究会を組織して勉強を継続しているところもみられてきています。当センターへもその支援要請があり、今後の福祉用具・住宅改修に関する制度の利用方法や技術的支援につなげていければ幸いです。

（担当：丸田）

表1 リハビリテーションに関する教育研修事業

月日(曜)	研修名	研修内容	講師	対象者	参加者(人)	参加市町村数/41市町村(%)
7月11日(火)	リハビリテーション従事者研修(第1回)	福祉用具・住宅改修制度を中心とした地域における支援方法	リハビリセンター職員	市町村担当職員等	49	23/41(56%)
9月19日(火)	リハビリテーション従事者研修(第2回)	福祉用具・住宅改修支援方法	・他		53	24/41(58%)
月日(曜)	研修名	研修内容	講師	対象者	参加者(人)	参加施設数/事業所数(%)
7月28日(金)	福祉用具・住宅改修に関する研修(南加賀)	福祉用具・住宅改修制度を中心とした地域における支援方法	リハビリセンター職員・他	介護支援専門員等	40	29/46(63%)
8月1日(火)	福祉用具・住宅改修に関する研修(能登中部)				51	32/46(70%)
8月8日(火)	福祉用具・住宅改修に関する研修(能登北部)				35	19/42(45%)
8月24日(木)	福祉用具・住宅改修に関する研修(石川中央)				89	68/132(52%)
計					215	148/246(60%)

バリアフリー推進工房活動紹介

モールド型座位保持機能付電動車いすの開発

電動車いすは、機能障害がある人の日常生活活動を広げるための有効な道具です。また、最適な座位保持機能が備わることによって、生活の質がより向上し、よりよい生活を送れる道具でもあります。

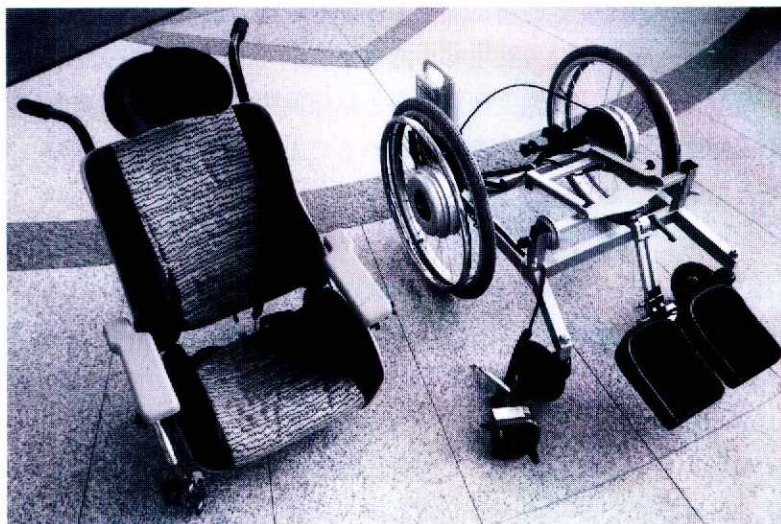
しかし、国内に普及する電動車いすを見る限り、座位保持装置の研究はそれほど進んでいるとは言えず、そのために利用できる対象者が制限されているように思われます。

私たちは電動車いすの座位保持機能の向上を目的に、デンマーク製のモールド型シートユニットを姿勢保持装置として応用し、筋ジストロフィー症の方に座位保持効果を持つ電動車いすを製作しました。

電動車いすでの座位保持を考える場合、座角度や背角度の調整機能、体幹支持に有効なモールド型シートなどの利用を検討する機会を多く経験します。今回製作した電動車いすは本人が座りやすく手を動かしやすい座角度、背角度を設定し、体幹の不安定さをクッションで包み込む方法で作られています。また簡易電動ユニットを利用することで、室内用車いすで小回り性も考慮し持ち運びも可能としました。

利用者は小学5年生の男の子で今まで移動方法がなく畳の上で座るだけの生活でしたが、電動車いすを利用することで室内の移動は自由になりました。また手の力は弱いですが、電動車いすの力も利用することで、自分でドアの開け閉めもできるようになりました。電気のスイッチや段差解消機の操作も体幹が安定することで手が使いやすく可能となりました。

日本の電動車いすは利用者のニーズに即した、オプション部品も含めて優れた姿勢保持機能を備えているとは言えず、そのために電動車いすの利用をあきらめている潜在的なユーザーは極めて多いと思います。



座シートと、電動ユニットを分離することで持ち運びが可能



完成した電動車いす

最近、県内企業の協力のもと電動車いすや、車いすの座シートを県内で製作することが可能となりました。

今後とも、優れた姿勢保持装置がいち早くユーザーに享受されるよう、各ケースを対象に調査研究を継続し、姿勢保持装置のあり方について考察および提案していきたいと考えています。様々な能力等を利用し電動車いすでの生活活動の拡大をと思われる方ご連絡ください。

(担当：寺田)



県内企業が製作した座シート

虹の窓から

アメリカで作業療法を学んで

野間 咲代子



私は平成12年5月に、アメリカの大学（作業療法課程）を卒業し、帰国後、当リハビリテーションセンターの臨時職員として、現在勤務しています。

私は高校3年の時、「英語を使えるようになりたい」という気持から、卒業と同時に若さと勢いだけで日本を飛び出してアメリカへ行きました。はじめはバーモント州の語学学校で英語を学び、次にマサチューセッツ州の短大で4年

制大学への編入を目的としたコースで一般教養を学びました。短大も終わりに近づき、4年制大学へ編入する際の専攻を決めるために本を見ていた時、「Occupational Therapy」という言葉を見つけたことが作業療法学科へ進むきっかけとなりました。作業療法士のことは高校時代に母から聞いて興味を持っていたのですが、アメリカに来てからはすっかり忘れてしまっていました。そうして、コロラド州立大学の作業療法学科に編入しました。

私と同期のクラス（75人）は、20歳から40代後半まで年齢層は様々でした。一度違う職業を経験した人が多く、他の学科と比べると平均年齢は少し高かったように思います。ほぼ全員が白人のアメリカ人で外国人は私一人でした。そのため会話の内容やスピードについていくのに大変苦労しました。日本はどこにあるのかさえ知らない人もいるのですから、彼らから見れば「得体の知れないアジア人」です。しかし、目立つためか教授や同級生に覚えられやすいというメリットもありました。授業で分からなかったところを聞いたり、質問したりするたびに丁寧に教えてもらえるようになりました。クラスメイトの中には日本や異文化に興味を持っている人がいて、仲良くなったついでに英語の面で助けてもらうこともよくありました。

専門課程の授業のなかでアメリカらしい内容だと感じたのは、「異文化を理解する」というものでした。人種の「るつぼ」と言われる国だけあって、人々の文化的な背景は様々です。例えば、「もし患者が英語を話せなかった場合どうしたらよいか」といったトピックがありました。その場合は、通訳をつける、指導は言葉でなく動

作で示す。そして、その人の文化を理解することが作業療法士にとって一番大切であるということを知りました。また他の授業では、作業療法のマーケティング方法を学びました。「作業療法士の技術がどれだけ役に立つことができるか」を相手（企業など）にどのようにアピールしていくかといった内容でした。アメリカ国内の作業療法士が増加していく中で、様々な方面への職域の開拓が重要になってくるのだと感じました。

そうこうしながら、約2年間の授業を同級生や教授に助けられ、支えられながらも長かった臨床実習を終えることができました。思ったよりも時間がかかりましたが、無事大学を卒業でき、アメリカの作業療法士の資格がとれたことをとてもうれしく思っています。

リハビリ一口メモ

水泳は本当に身体にいいのか？

ある日理学療法室に外来で水泳の愛好家の40歳くらいの女性がこられた。肩こりと首の痛み、時に腕にしびれがある。この患者さんは毎日2000mから3000m泳いでいるという。かなりのトレーニング量だと思う。これだけ運動して肩こりとは？と思う人も多いことだろう。一般に水泳は重力の影響が少ないため身体によいといわれている。しかし、平泳ぎにしるクロールにしる、水泳は脊柱や肩の関節を通常の可動域を越えて動かす。頸椎や腰椎、肩の関節にそのストレスが何時間も繰り返される。水泳は同じ動きを繰り返し行うスポーツである。平泳ぎでは頸椎の過伸展が繰り返行われ、クロールでは頸椎のねじれが繰り返行われる。Stanley.V.Paris博士はスイマーのオーバーユース（過使用）症候群について警告している。過剰な水泳の訓練は頸椎や腰椎の障害を引き起こす。ランナーズハイと同じことが水泳にも起こる。だんだんと長距離を泳がないと満足感が得られなくなる。どんなスポーツでもやりすぎは故障の原因になる。健康維持のためのスポーツはチンタラチンタラやるのがよい。水泳を健康のためにやる場合、正しいフォームで泳ぐ。同じ種目を長時間行わない。競争はしない。週に2日は休む。ウォーミングアップを十分に。痛みのあることをしてはいけない。などの注意が必要である。アテネオリンピックにでるなら別ですけど……。

（担当 荒木）

〈能登北部保健福祉センター 福祉用具・住宅改造相談日〉

- 個別相談（毎月第1木曜日、午後1時～5時、但し電話等で予約下さい）
TEL 0768-22-2011
- 福祉用具の展示見学
（土・日・祝祭日を除く9時～5時）

〈南加賀保健福祉センター 福祉用具・住宅改造相談日〉

- 個別相談（定期毎週月曜日、午後1時～5時、その他電話等での問合せにも応じます）
TEL 0761-22-0793
- 福祉用具の展示見学
（土・日・祝祭日を除く9時～5時）

〈石川県リハビリテーションセンター 福祉用具・住宅改造相談日〉

- 個別相談（土・日・祝祭日を除く毎日午前9時～5時、但し電話等で予約下さい）
TEL 076-266-2866
- ほっとあんしんの家見学
（祝・祭日を除く9時～5時、団体での見学は予約下さい）

編集・発行 石川県リハビリテーションセンター
〒920-0353 金沢市赤土町-13-1
TEL (076) 266-2866 FAX (076) 266-2864
E-mail iprc@po.incl.ne.jp
ホームページは「石川県」版に開設
<http://www.pref.ishikawa.jp/eisei/rihabiri/index.html>

